

1. 評価結果概要表

作成日 平成 21年2月15日

【評価実施概要】

事業所番号	4271402051		
法人名	有限会社 ナーク		
事業所名	有限会社 ナーク グループホーム小浜きたの		
所在地 (電話番号)	長崎県雲仙市小浜町北野1048-2 (電 話) 0957-76-0177		
評価機関名	SEO (株)福祉サービス評価機構		
所在地	福岡市博多区博多駅南4-2-10 南近代ビル5F		
訪問調査日	平成 21年 2月 3日	評価確定日	平成 21年 3月 2日

【情報提供票より】(平成 20年 10月 1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成16年9月1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	17人	常勤	7人, 非常勤 10人, 常勤換算 5.3人

(2) 建物概要

建物形態	併設/ 単独	新築 /改築
建物構造	木造平屋造り	
	2階建て0	1階 ~ 2階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	10,500 円	その他の経費(月額)	4,500 円
敷 金	有(円) 無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円) 無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1,000 円		

(4) 利用者の概要(平成 20年 10月 1日現在)

利用者人数	18 名	男性	4 名	女性	14 名
要介護1	3 名	要介護2	2 名		
要介護3	8 名	要介護4	3 名		
要介護5	1 名	要支援2	1 名		
年齢	平均 84.2 歳	最低	61 歳	最高	99 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	公立新小浜病院、愛野記念病院、ひらゆ医院、茨尾歯科医院
---------	-----------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

16年開設以来、「小浜きたの」は6年目に入った。運営者である代表(管理者)は、常にご利用者のごこと、職員のことを考え、運営方針の実践に取り組んできた。ホームの課題を真摯に受け止め、必要に応じて適切な人事を考え、ホームの良きアドバイザー・応援団となるべき方々にお願ひし、ともに運営を続けてきた。その成果が実を結び、職員の方(質)も確実に向上してきており、ご利用者も、このホームの主(あるじ)として役割を持って生活をされている。職員は、代表の考えを素直に受け止め、現場において実践を続けてきている。ご利用者のニーズを見つめ実現させていく・という目標は、「成果」と言う結果が見えてきており、ご利用者の願ひを叶えることに対して、職員は妥協を許さない姿勢を見せている。今では、他のご利用者のお世話をしてくださったり、外出時の見守りをしてくださるなど、「人の役にたいたい」と言うご利用者の思いの実践が、日々の生活の中で行われるまでになっている。ご利用者自ら、玄関の掃除や、植木の剪定、畑作りをし来訪者への心配りも続けている。心身状況の変化は見られるが、その時々のお力を発揮していただける場面を作りたいと職員は一心に考えている。地元が小浜温泉でもあり、ご利用者は月に数回は地元の温泉に行っている。青い空、海、夕日、山の緑の中、ご利用者も職員も「のびのび」とした生活ができています。ホームである。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目	①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4) 昨年度の外部評価以降、全職員で改善策を検討し日々実践を続けてきた。①ご利用者ごとのニーズを個別に把握し対応できるようになってきた。②人材育成にも力を入れ、接遇面(言葉・態度)の研修も行なっている。日々、理念を意識することで職員の視点が深まり、意見も多く出るようになってきた。③新しい管理者補佐を中心にチームワークを強化し、意見交換が活発化している。
	②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4) 今年度の自己評価は、管理者補佐、職員などで自己評価をおこない、代表(管理者)が補足をしていった。代表は、今年度も自己評価に積極的にに関わり、「日々の業務がマンネリ化しないように振り返りをおこなうように」と職員に説明をした。項目を見ていく中で、職員は今後の取り組みの方向性も見え、新たな気付きをいただける場となった。
重点項目	③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6) 昨年以降の取り組みで、会議にご利用者も参加されるようになった。2か月に1回、雲仙市役所の方、老人クラブ代表の方、ホームの顧問、代表、職員などが集い、参加者との意見交換が行われている。運営推進会議の時には、「よりホームのことを理解していただきたい」と代表は考えており、会議の最初に、日々の暮らしぶりや行事に関する報告を細やかにこなしている。防災に関して、参加者から無線連絡に関するアドバイスをいただき、検討する機会につながっており、いただいた意見を運営に反映させている。有意義な会議となっている。今後は、ご家族の参加を増やしていく予定である。市役所等の方にも訪問を続け、相談しやすい関係が築けている。
	④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8) ご家族が来訪時、日ごりの様子や健康状態などを個別に報告するとともに「何かありましたら、いつでもおっしゃってください」と、代表(管理者)・職員・ケアマネージャが声をかけている。平成19年9月29日に家族会が発足し、年2回、お茶会の時に集まり意見交換を続けている。頂いたご意見は、記録に残し会議などで対応策含めて話し合いをしている。1月から新しいケアマネージャが勤務し、現在、ご家族にも挨拶を続けている状況である。元々勤務しているケアマネージャとともに、自宅訪問の回数も増やしていく予定であり、更なるご家族との密な関係を築いていきたいと考えている。
重点項目	④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3) もともと、代表(管理者)のご両親が地元で診療所をおこなっていた経緯もあり、現ホームに対する地域の方の信頼関係も築けている。現在も引き続き、地域の方々へ貢献していくために、お茶会を開き地域の方を御招待したり、医療連携看護師が講師となり介護教室を開くなど、積極的な取り組みを続けている。お祭りや清掃活動など、地域の行事にもご利用者と一緒に参加し、「周辺地域との交流・・・」という理念の実践を続けている。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	この地域で医療を行っていた代表のご両親の考えをもとに、管理者(代表)が法人の基本理念「老いても障害を持っていても自分らしく当たり前に普通に暮らしたい」を作り、それを基にホームの理念を作られた。「幸せをつくるグループホーム小浜きたの」→「なかよく暮らそう」・・・と言うホームの理念の基にホームの運営方針があり、その5つ目に「ホーム内にとどまらず周辺地域との交流により・・・」という地域密着型の考えが盛り込まれている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	20年4月から新しい管理者補佐が就任し、運営に関する話し合いを代表(管理者)と続けてきた。ケアに関する新しい視点を取り込み、職員の考えを柔軟に日々のケアに活かしてきた。毎月の会議の中で、管理者や顧問が理念に関する話を一つ一つ丁寧に説明するとともに、職員の面接時も、管理者から理念に関する説明を行い、入社時から理念の共有に努めている。職員は、毎日理念を頭に思い浮かべ、理念を意識することを大切にしてきた。自分の行動を振り返りながら自問自答を続けてきており、確実に質の向上につながってきている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	管理者が長年培ってきた日本の文化、茶道をホーム内の行事にも取り入れ、地域の方をお招きして日本文化を伝承する機会を作っている。毎年、参加者が増えており、「落ち着きます」と言う声も聞かれている。地域のお祭りには積極的に参加し、マラソンの応援や文化祭など、職員、ご利用者ともに参加している。16年より自治会にも加入し、清掃活動や自治会の消防訓練にもご利用者と参加している。ホームの医療連携看護師が、地域の方向けに介護教室も行っており、地域貢献を続けている。	○	今後、ホームが、より地域の方々との交流ができるよう、小学校や中学校の子供たちとの交流をはかっていると考えており、まずは学校に挨拶に行く予定にしている。また、地域の文化祭に、ご利用者の作品を出品していきたいとも考えており、今年度は、ホーム内にご利用者の陶芸作品を展示し、来訪者に見ていただいた。積極的に地域交流を行っていく意欲があり、今後の更なる取り組みを期待していきたい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	運営者(管理者)は外部評価の意義を理解し、自ら積極的に評価に取り組んでこられた。昨年度の外部評価以降、全職員で改善策を検討し、取り組みをおこなってきた。ご利用者一人一人の個別のニーズを把握し、個別に対応していくことを心がけてきた。また、昨年度の改善策にも掲げていた「自己評価を職員全員でおこなう」ことも実践できた。項目を通して「こういう視点で取り組んでいけばいいのだ」と気づけた職員も多かった。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	代表からの温かい挨拶から始まり、ご利用者の生活状況・介護状況や運営方針などを報告している。ホーム側からの報告内容を基に、参加者からの質問や意見が続いている。昨年以降の取り組みで、ご利用者も参加されるようになり、議題に即した感想や意見などもご利用者から言っていたり、毎回、有意義な会議となっている。ホームに関する内容がしっかり話し合われており、ホームのことを理解していただってきている。	○	ホームの行事やお茶会などには、ご家族も参加できているが、現在、運営推進会議には、ご家族の参加はない。今後も、ご家族への呼びかけを続け、一人でも二人でも参加いただき、ご意見をいただけるような取り組みを続けていきたいと考えている。また、市役所の方に、市の現状等の講話をしていただくなど、今後も引き続き、良い勉強の機会になっていくことも期待していきたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	代表が、広域連合や雲仙市役所の窓口を訪問し、ホームの状況を報告している。運営推進会議の案内・ホームたよりも持参している。防災については広域連合の窓口と相談し、文化祭については雲仙市に相談しているが、それぞれ、今後につながる回答をいただいている。また小浜町支所主催の地域ケア会議にも参加している。	○	日々のケアの中で、職員はご利用者お一人お一人に向き合い取り組みを続けている。昨年と同様、今後も、その実情をより理解していただけるように、地域ケア会議の中などで、事例発表をおこなっていきたく考えている。行政の方に、具体的な取り組みを見ていただくことで、課題に対するアドバイスも頂きやすくなることも考えられ、今後の更なる質の向上に向けた取り組みになることを期待していきたく。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	ご家族が来訪時、日ごろの様子や健康状態などを個別に報告している。行事の時や、日々の暮らしぶりを撮影した写真を、ご家族にお渡しするとともに、電話や文章での報告もしている。状況によっては、ケアマネジャが自宅を訪問し、ご家族とゆっくりお話しをする機会も作っている。金銭の収支も毎月報告している。	○	管理者は、ご家族と職員の会話が足りないのではないかと感じており、ご家族が知りたいと思っている情報を、もっとお伝えできる機会を増やしていく予定にしている。今後も、家族会の活動を通して報告をおこなっていくとともに、ケアマネジャによる自宅訪問の回数も増やしていく予定であり、更なるご家族との密な関係が築けていくことを期待したい。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族には「何かありましたら、いつでも言ってください」と、代表・職員等が声かけしている。1月から新しいケアマネジャが勤務し、現在、ご家族にも挨拶を続けている状況である。平成19年9月29日に家族会が発足し、年2回、お茶会の時に集まり意見交換を続けている。頂いたご意見は、記録に残し会議などで対応策含めて話し合いをしている。	○	代表は、「ご家族の方はホームに対して遠慮をされておられるのでは・・」と感じている。ご家族の方にもっと意見を言っていただきたいと積極的に作り、話し合いができる場面を増やしていきたいと考えている。今後は、新しいケアマネジャによる自宅訪問も予定されており、ホーム側の思いが家族に伝わり、お互いのコミュニケーションがより深まっていくことを期待していきたく。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	運営者である代表(管理者)は、ご利用者のためにも馴染みの関係が大切であることを理解している。異動は最小限にしているが、職員は、同じ建物の1階と2階を行き来しており、両ユニットの職員とご利用者は、顔馴染みの関係ができていく。職員同士の仲が良く、職員同士の意見交換も活発になってきている。基準以上の人員配置をおこなうとともに、職員の休みの希望に極力、応じている。管理者や管理補佐が、職員の個人面談をおこない、課題があれば一緒に考えるようにしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	運営者である管理者は、今年度の育成目標のテーマを「接遇」と決め、言葉、言動などの教育に取り組んできた。月に2回、内部研修を行い、ケース検討会もおこなっている。年々、検討会での意見交換の内容が深くなっており、具体的なアイデアが多くなっている。ホーム内の看護師より、医療面の講義を受ける機会も多く、確実に職員は知識が増えていっている。外部研修にも参加できるようにし、参加者は、定例会の時に資料を他職員にも配布し、内容を伝達している。管理者・顧問・管理補佐・看護師などが、現場の指導者となっている。	○	管理者等は、今後、更に各職員の経験、習熟度に応じた職員個別のレベルアップをしていきたいと考えている。経験年数別の研修なども実施していきたいと考えており、職員個々の育成計画の作成とあわせて、さらなる質の向上に向けた取り組みがおこなわれていくと思われる。今後を期待していきたく。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	運営者である代表は、同業者との交流をおこなっていく必要性を理解しており、長崎県認知症グループホーム連絡協議会に加入している。また、昨年10月から、地域の14事業所で立ち上げた雲仙市グループホーム連絡協議会(UGK)にも加入し、今後も、研修などに職員を参加させていく予定にしている。研修会への参加、事例検討会、情報交換などもおこなっている。ホームで開催するお茶会にも、他ホームを招待し交流の場を作っている。	○	現在、ホーム同士の訪問は、主にこちらからの訪問が主になっている。今後は、相互訪問ができるように取り組んでいきたいと考えており、他のホームの方も見学に来ていただけるような取り組みをしていきたいと考えている。各研修会で、相互訪問の提案をしてみるなど、地域の同業者全体で質の向上につなげていけることを期待していきたく。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居に際しては、ご本人のお気持ちを一番大切にしている。入居前に、管理者・ケアマネジャが、ご利用者の自宅を訪問し顔馴染みの関係を作るよう心がけている。ご本人にもホームを見学していただき、短時間からの通所を始めて徐所に時間を延ばす等、少しずつ慣れていただくよう配慮している。今までの生活歴を教えてください、ご本人の馴染みの品物を持参いただいたり、他のご利用者を紹介し、仲良くできるような場を作るなど安心できる環境作りにも心がけている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜ぶ哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は、普段からご利用者に教えてもらう場面が多い。教えていただける場面を多く作れるように職員は意識しており、和裁が得意な方に、針と糸を準備して縫物をお願いしたり、食事の時には調理の仕方を教えていただくなど、意識して場面作りをおこなっている。また、ご本人の思いや根本にある苦しみや不安にもしっかり寄り添い、語ってくださる言葉を大切に受けとめるようにしている。職員は、その一つの言葉から、人生の奥深さを学ぶことも多い。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は、ご利用者一人一人の生活歴、家族背景なども大切に、今のお気持ち(行動)と結びつけながら個別のケアをしている。繰り返し「帰りたい」と言われるご利用者のお気持ちに向き合い、ご本人が安心できる方法を職員全員で話し合うなど、ご利用者のお気持ちや不安を知るための、あきらめない取り組みを続けている。お気持ちを言われない方にも、食事づくり、散歩、レクリエーション時などの時間の中で職員はそばに寄り添い、相づちの仕方・表情などから思いや意向を知るように努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	昨年からの重点取り組みとして、職員はご利用者のニーズを個別に把握し、それを実現するための話し合いを続けてきた。計画作成にあたっては、ケアマネジャが中心となり作成しているが、日頃の関わりの中で、あらかじめご本人、ご家族の意見、希望を聞きながら、医療連携看護師・かかりつけ医と相談した結果も踏まえ、職員とも意見交換を続けながら介護計画を作成している。「地域で暮らす」という視点を盛り込まれている方もおられる。	○	ご利用者本位で介護計画を作成しているが、今後は、再度、アセスメントをおこない、まずは、現状のご利用者の心身の状況、活動状況、外出状況、ご家族の役割、介護が必要な状況などを、細かく情報収集していくことで、より具体的な課題が見えてくるのが期待できる。ご利用者・ケアマネジャ中心でありながらも、今後は、日々、介護を担当している職員と一緒に介護計画を作成するシステムを作っていくことで、より協働で作る介護計画となっていくことを期待したい。「地域で暮らす」という視点も盛り込み、合わせて、介護者の動きを表現した個別介護計画の作成にも取り組んでいかれてほしい。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じた見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	ご利用者の日々の状況については、毎日の申し送りの中で職員間の共有ができています。また、1ヶ月に1度、ミーティングの中で、全利用者の評価をおこない記録に残している。更に事例検討会の中では、各ユニット1例ずつ出し合い、職員全員で検討がされている。ご利用者、ご家族にも新たな希望が生じていないか常に声かけしている。変化が生じた時は、見直しの設定した時期の前でも、新たな介護計画を作成している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々 の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	職員は、ご利用者の要望に応じて、それを実現できる方法を職員全員で検討している。「自宅に帰りたい」などの要望がある時は、ご家族とも話し合いをし実現できる方法を根気強く考えてきた。外出時の排泄課題を解決するために、ポータブルを持参し、周囲にはゴザで目隠しをするなど、あきらめない対応を続けている。入院中のご利用者が、「ホームに帰りたい」と望まれる方が多く、ホームの看護師が、病院の医師・看護部長とも連携を取っている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に し、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホーム内の医療連携看護師が、医療機関(医師・看護部長等)との信頼関係を築いている。ご本人・ご家族などの要望を大切に、以前からのかかりつけ医で受療していただいている。すべてのかかりつけ医とは、日頃から情報交換を密にしながら信頼関係を築いている。提携医は、定期的に往診もしてくださり、必要時は適切な医療機関の紹介もしていただいている。通院時は職員が通院介助をしているが、結果は医療連携看護師から家族に報告している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居時に「終末期にも対応している」ことを全家族に伝えており、ホームで対応できる限り、住み慣れたご自分の部屋でいつもと変わらない生活を送って頂くようにしている。ご利用者・ご家族の意向も把握しており、なるべくご希望に沿った対応ができるようにしている。現在の課題として、緊急に応じた往診ができる体制ではなく、最後は病院での看取りと言う状況になっている。病状に応じて、医療連携看護師を中心にしながら、ご利用者、ご家族、医師などと繰り返し話し合いを続け、全員で医療・介護方針を共有できるように努めている。	○	今後、終末期に対する介護職の知識・技術向上のための研修を実施していく予定である。また、今後も引き続き、終末期に対する医療機関(医師)との詳細な打ち合わせを続けるとともに、ホームでの終末期の対応マニュアルを整備していきたいとも考えている。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	代表である管理者は、ご利用者の人格を尊重し、常にご利用者の立場に立ったサービスの提供に努めることを、自ら実践するとともに職員にも伝えてきた。今年度の目標に「接遇」を掲げているため、職員も、日々、理念を立ち返り、日々の自分の言動・行動の振り返りが行えるようになった。ご利用者の不安からくる行動に対しても、原因を知ろうとする努力を続けており、更に職員に優しさが増えてきている。安心につながる対応を考え続ける、ご利用者本位のケアが行われている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に し、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員は、ご利用者の生活歴を把握し、生活のリズム・その方らしい暮らしとは、何を考え続けている。ご利用者が望む事に極力応じるようにしている。自宅の馴染みの品物を持ち込み、自宅でされていた役割を継続していただきながら、自然とご自分の生活リズムを作っていた。代表が、2階の海側に神棚を作り、日常の中でお参りができる環境を整えている。当たり前の“生活”“日課の遂行ができる”環境をいかに作っていくのか、職員全員で工夫を続けている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ご利用者に食べたい物を探るようになっている。地産地消で地元のお店にご利用者と一緒に買い物に行き、ご利用者と一緒に美味しいお料理を作るように心がけている。下ごしらえ、味見、盛り付け、配膳、箸おき、食後の片付け、テーブル拭きなど、お一人お一人の力に応じて手伝っていただいている。毎日、ホームの畑に行き、青梗菜や葱、トマトなどを収穫し、食材として使われている。ご利用者の大好きな小浜ちゃんぼんは週に1回は作っており、他、えたりの酢の物などの郷土料理も楽しんでいる。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	地元が小浜温泉でもあり、月に数回は地元の温泉に入りに行っている。1回50円ということもあり、ご利用者は日常的に温泉を楽しんでいる。ホームでの入浴は週に4回を原則にしているが、ご希望で、毎日入浴されている方もおられる。羞恥心への配慮と合わせて、職員と1対1でゆっくり会話を楽しめる時間となるような配慮もしている。安全面も配慮しながらも、職員はドアの外で待機し、一人でゆっくり入浴されている方もおられる。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	今年度、職員が力を入れてきた、ご利用者のニーズを見つめ実現させていく・・・という成果が見えてきている。お一人お一人の、長年培ってきたお力を発揮していただける取り組みは充実してきている。今では、他のご利用者のお世話をしてくださったり、外出時の見守りをしてくださるなど、「人の役にたきたい・・・」と言う思いの実践が、日々の生活の中で行われるまでになっている。心身状況の変化も見られるが、その時々のお力を発揮していただける場面を作っていきたいと職員は考えている。	○	昨年から引き続きの希望でもある、ご利用者の作られた作品を文化祭に出品していきたいという予定がある。昨年は、ホーム内に陶芸作品などを飾り、来訪者に見ていただいた。「文化祭に出す」という新たな目標ができることで、普段の暮らしにも活気が出てくる可能性もあり、お力を発揮できる場面作りが、さらなる社会交流につながっていくことを期待したい。
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	地域には季節の花々が咲きほこる場所も多く、その時にしか味わえないことを大切にして、外出を楽しんでいる。外出にともなって生じる排泄場所などにも考慮し、ポータブルトイレや目隠しのゴザなどを持参することもある。職員も一緒に外出を楽しんでおり、その瞬間瞬間の心・表情を写真に残している。お墓参りや買い物など、ご本人の行きたい場所を確認し、職員と一緒に外出している。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	代表・職員含めて、鍵の弊害を理解しており、玄関は朝7時から夜20時頃まで開放されており、ご利用者、ご家族の方には自由に入出入りしていただいている。2階のご利用者も、エレベーターや階段は自由に使用でき、両ユニットの職員同士で声を掛け合い、お一人お一人の行動の確認や見守りをおこなっている。近所の方にも、必要時の協力、連絡をいただけるようお願いに行っている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	平成20年は、4月と10月に2ユニット合同で災害時の訓練をしている。全職員、ご利用者、消防署、消防団が参加し、火災時、地震、水害、夜間などを想定しての訓練もおこなっている。2階の避難方法も消防署と検討中であり、災害時、すぐにベランダに出られるように、ベランダの片付けなどの徹底も実施している。また、災害時に備えた備品は、懐中電灯、飲料水用ポリタンク、毛布、ポータブルトイレ、排泄物の凝固剤、ポータブルラジオなどを準備している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	運営者である代表が栄養士であり、栄養バランスの偏りがなく、美味しい食事が提供できているかのチェックをしている。栄養管理ソフトも購入しており、今後は活用していく予定である。お一人お一人の食事に関する好みを把握するために、定期的に嗜好調査(聞き取り)をおこなっている。代表は「食事が一番大切である」と考えており、ご利用者の好みを大切にしている。定期的な体重測定・血液検査を行い、医師からのアドバイスもいただいている、食事量、飲水量ともに把握、記録している。	○	季節の旬の食材を利用して献立を作っており、栄養士である代表(管理者)がバランスなどを含めて管理している。今後、食事内容を写真に撮って残しておきたいと考えられている。今後、その写真を通信に掲載したり、運営推進会議のメンバーの方などにも見ていただくことで、他の方の食事作りの参考にもなると思われる。今後も、代表を中心として更なる“食”への取り組みを期待していきたい。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	海、山、空の眺めを贅沢に楽しむことができる立地にホームは位置しており、裏庭には緑が広がっており、木々が色づき、鳥のさえずりも聞こえてくる。淡い黄色のモダンな外見は、周囲の環境の中で目を引く存在となっている。玄関の入り口には、火鉢(金魚用)あり、金魚が来訪者を迎えてくれる。代表のご両親が昔ながら愛用していた冷蔵庫やソファなどを共有空間に活用している。ホームの周囲に咲いている季節の木々や花を利用者が摘んできて食卓に自然に飾られており、家具の配置や掲示物は季節に応じて変えている。2階には神棚が祭られており、ご利用者の心の拠り所となっている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各部屋、ご利用者に応じた部屋となっている。ご利用者・ご家族の方々と一緒に相談しながら、ダンス、いす、テレビ、位牌など持ち込まれており、ご利用者にとって慣れ親しんだものに囲まれるよう配慮している。お一人お一人が安心してできる部屋作りを続けている。消防署の指導もあり、昨年の課題でもあった、カーペットは、カーテンと同様すべて防災のものにするなど、安全面での配慮も続けている。		